

## 夫婦関係に及ぼす欺瞞動機と欺瞞方略の影響

周 玉慧

深田博己

(台湾中央研究院)

(広島文教女子大学)

本研究では、欺瞞的コミュニケーションに着眼して、夫婦間に発生する欺瞞動機と欺瞞方略を測定する尺度を作成し、結婚生活の質に及ぼす欺瞞動機と欺瞞方略の影響を検討した。229組の台湾人夫婦を対象とし、5因子の欺瞞動機（関係促進、関係維持、面子保護、利己的目的、雰囲気操作）、4因子の欺瞞方略（脚色、はぐらかし、偽装、隠蔽）、および充実度と後悔度の2側面の結婚生活の質の評価を求めた。確証的因子分析の結果により、仮定された欺瞞動機と欺瞞方略の因子が実証された。結婚生活の質は欺瞞動機や欺瞞方略によって異なり、結婚生活の質に対して、関係促進動機、関係維持動機あるいは脚色方略は好影響、利己的目的動機あるいははぐらかし方略、隠蔽方略は悪影響を及ぼすことが見出された。また、充実度に及ぼす欺瞞動機と欺瞞方略の交互作用が見られ、限定効果と緩和効果に類似したパターンが示された。

**キーワード**：欺瞞動機、欺瞞方略、結婚生活の質、夫婦ペア、階層線形モデル

### 問 題

われわれは日常生活を営む時、よく嘘をつく。先行研究では、対人コミュニケーションの中の4分の1以上は、嘘や欺瞞的なものだという事実が報告されている (DePaulo, Kashy, Kirkendol, Wyer, & Epstein, 1996; Turner, Edgley, & Olmstead, 1975)。多くの人は欺瞞を道徳上の悪と見なしている。しかし、社交上の嘘もつけない人は他者に嫌われたり、社会的に不適応を起こしたりする可能性があり、日常生活でのささやかな嘘や誇張は人間関係の緊張を和らげる機能をもつ。対人関係を円滑に営むために、また、相手を傷つけないために、欺瞞方略を使用することの重要性は無視できない。

渋谷・渋谷 (1993) は東京の大学生と社会人を対象として、誰に嘘をつくのかについて調査をした。その結果、大学生の場合、男女を問わず、嘘の対象は、親、友人、上位者（アルバイト先の上司、警察など）の順になっている。その一方、社会人の場合、嘘の対象には性差がみられ、男性は、配偶者、友人、親、上司などにほぼ同じように嘘をつくが、女性は、子供に最もよく嘘をつき、その次は親と友人、そして配偶者と上司であった。

Ekman (2001) は、職場、政治、婚姻など様々な領域にわたって、欺瞞の特徴と影響を論じ、Knapp & Comadena (1979) や Miller, Mongeau, & Sleight (1986) は、親密な関係における欺瞞の形式と機能を検討する必要性が大きいと述べ、DePaulo & Kashy (1998) は、夫婦間の欺瞞にはかなりの独自性があると指摘した。また、利 (1995) は、台湾の夫婦を対象として夫婦間相互作用を検討し、夫

婦がお互いに反省の気持ちを生じさせない限り、夫婦間の付き合いの仕方が固定化される、と示唆したが、夫婦間の欺瞞にも類似した特徴が見られる。例えば、Cole (2001) は、もし夫婦のいずれかが相手の行動を欺瞞だと考え始め、相手を疑うと、それに呼応して自分自身も欺瞞を多く使用するようになり、その結果、夫婦間関係が悪化し、その後の疑いと欺瞞が夫婦双方にますます増大すると考えられることから、夫婦間の問題の解決や逃避の道具として欺瞞を使用することが夫婦関係の悪化を招く、と指摘した。

ところで、先行研究における欺瞞 (deception) の定義を整理すると、以下のようになる。①Buller & Burgoon (1994) は、情報源が情報を統制する (例えば、言語的メッセージや非言語的メッセージの伝達を操作する、あるいは状況の手がかりを操作する) ことによって、対象者の信念や理解を誤った方向へ変容させようという“騙しの意図”を欺瞞と捉えた。②Mitchell (1986) は、情報源が利益を得るために用いる“偽りのコミュニケーション”を欺瞞とみなした。③Krauss (1981) は、情報源がメッセージを誤りだと知りながら、他者の信念や理解を操作しようとする“操作的行動”を欺瞞と定義した。④Ekman (1985) は、有益な情報を与えないで対象者を誤らせるという“故意の選択”を欺瞞と定義した。⑤Vrij (2000) は、真実でないと知りながら情報源が予告なしに他者の信念を形成させようとする“故意の意図”を欺瞞と捉えた。

これらの研究に見られる欺瞞の定義から、欺瞞の成立には、情報源と対象者の両方の存在が不可欠であり、言語や非言語のメッセージが含まれていることを前提にしつつ、①メッセージの偽装 (falsification)、②情報源の動機の故意性 (deliberation)、および③対象者を誤らせる意図 (intention) といった特徴が必然的に随伴すると考えられる。したがって、記憶の誤り、言い間違い、言葉の意味の誤解などは欺瞞とは見なされないし、他者とのコミュニケーションではないために自己欺瞞 (self-deceptions) も欺瞞から除外される。これらの概念に基づき、本研究では、“情報源が真実のメッセージを提供しないことによって、あるいは真実と異なるメッセージを提供することによって、対象者を故意に誤った方向に誘導する行動”と欺瞞を定義する。

欺瞞を研究する際には、真っ先に、“人はどのような理由から欺瞞に走るのか” (欺瞞の動機) と“人はどのような種類の欺瞞を採ろうとするのか” (欺瞞の方略) という2つの疑問が浮かぶ。欺瞞の動機とは、欺瞞者がなぜ欺瞞を選択するのかという原因、理由、目的を指しており、その内容はかなり幅広い。欺瞞の動機を整理した Vrij (2000) は、①他者へ良い印象を与えようとしたり、自己を保護しようとしたりする動機、②利益を得ようとする動機、③処罰を回避しようとする動機、④他者の良い印象を作り上げようとしたり、他者の利益を増大させようとしたりする動機、⑤対人関係を維持しようとする動機、の5種類の欺瞞動機を挙げた。欺瞞の目的として、渋谷 (1996) は、自己高揚と対人関係の維持の2つが欺瞞の目的と考えた。欺瞞の動機として、Buller & Burgoon (1994) は、①処罰の回避、自己利益の獲得と保護、自己利益を得るために他者を傷つけることになるという矛盾の回避、などの道具的動機 (instrumental motives)、②自己と相手との関係の維持・促進、自己と相手の関係における緊張・葛藤の回避、相手と第三者との関係の維持・改善、などの対人的動機 (interpersonal motives)、③相手の自己印象および相手の自尊心の維持・調節、欺瞞者の印象の保護・高揚、などの同一性動機 (identity motives)、の3種類を指摘した。欺瞞の動機を“自己”志向と“他

者”志向の2つに分類した DePaulo et al. (1996) は、“個人”と“他者”それぞれの心理的側面（切迫な状態の回避、面子の保護、不快の回避、個人のプライバシーの保護、自己感情の調節、印象操作など）と物質的側面（情報入手の容易化、身体的処罰の回避、財産や人の安全の保護、個人や他者の地位の保護、個人や他者の被害阻止など）に関する有形・無形の価値あるものを保護したり促進したりしようとするを、欺瞞動機と見なした。これらの研究をまとめると、欺瞞の動機は、関係の促進、関係の維持、自分や他者の面子の保護、道具的・利己的目的、雰囲気操作の5種類に分類できると考えられる。

欺瞞方略とは、欺瞞者がどのような内容の欺瞞を選択・使用するかを指している。Buller & Burgoon (1994) は、欺瞞方略を、①偽造・捏造 (fabrications)、②隠蔽・省略 (concealment/omissions)、③誇張・作り事 (exaggerations/fictions)、④半事実 (half-truths)、⑤暗々の誤伝達・誤誘導 (implicit falsification/misdirection)、⑥反道徳的行為 (crimes)、⑦冗談 (playings)、の7種類に整理した。Metts (1989) と Blair, Nelson, & Coleman (2001) は、①すべての情報を統制しながら、僅かに部分的に真実の情報を伝える省略・遺漏 (omission)、②誇張して真実の情報を操作したり、言葉の意味を曖昧にして浅くしか言わずに、相手にすべての真相に気づかせず誤解させる曲解 (distortion)、③情報を偽造したり、真実を否定したりする偽造 (contradiction, falsification)、といった3種類の欺瞞方略を取り上げた。DePaulo et al. (1996) は、偽りの程度から欺瞞方略を、①真実と完全に異なったり相反したりする、全く誤った情報を与える作り話 (outright lies)、②真実より大げさな印象を作る誇張 (exaggerations)、③詳しい情報を回避したり省略したりして、誤解を招く方法で事実を述べる隠匿 (subtle lies)、の3種類に分類した。本研究では、上記の研究を参考にしながら、情報の偽りの程度と情報の操作の程度から、欺瞞方略には、①部分的に偽る脚色、②情報の焦点をそらせるはぐらかし、③完全に偽りの情報を与える偽装、④真実の情報を隠す隠蔽、の4種類が存在すると仮定する。

欺瞞の行動や動機については、性差の存在が報告されている。アメリカの研究では、①男性の方が女性よりも欺瞞を受け入れやすい、②男性の方が女性よりも欺瞞行動をとりやすい、③男性の方が女性よりも巧妙な欺瞞技法をもっている、④女性は相手の自尊心や面子を保護するため、男性は自己の自尊心を保つため欺瞞行動をとるという欺瞞動機の違いがある、などの結果が発見された (Blair et al., 2001; Camden, Motley, & Wilson, 1984; DePaulo, Stone, & Lassiter, 1985; Zuckerman & Driver, 1985)。また、女性の方が男性よりもより誠実であることも報告された (DePaulo, Epstein, & Wyer, 1993)。しかし、日本の研究では逆の結果が示された。東京の大学生と社会人を対象とした欺瞞の研究においては、大学生の場合、64%の男性と86%の女性が、社会人の場合、72%の男性と85%の女性が他者に対し欺瞞の行動をとったことがあること、すなわち、日本人女性の方が日本人男性よりもより欺瞞行動を多くとることが報告された (渋谷・渋谷, 1993)。この結果に関しては、①日本人女性の方が自己開示しやすい、②日本人女性の方が欺瞞の動機がより高い、③日本人男性は嘘ついたとしてもアピールしない傾向がある、などの原因が推測された。

相手によって欺瞞の形式と機能は異なることも指摘されている。Metts (1989) は、大学生と成人を対象として自分にとって非常に重要な人を1人思い出させ、欺瞞の状況と動機を書かせた。その

結果、①重要な他者として、配偶者、婚約者、恋人、友人の4種類の人、②欺瞞方略として、偽造、曲解、省略の3種類の方略、③欺瞞動機として、相手中心、自己中心、関係中心、問題中心の4種類の動機が見出された。そして、重要な他者である相手の種類を問わず、偽造を用いる頻度が最も高く、相手が傷つくのを避けたいという相手中心の動機が最も多いことが示された。また、①他の3種類の相手よりも配偶者に対しての方が、省略方略を使う頻度は最も高く、偽造方略を使う頻度は最も低いこと、②友人に対しては、自己中心の動機（自分の資源を守る動機や相手からの非難を避けたい動機）が最も多いこと、③配偶者に対しては、相手の面子や自尊心を守る動機がよく働き、恋人に対して関係破壊を避けたい動機がよく働くこと、が示された。さらに、重要な他者との関係満足度や親密度は、欺瞞方略の使用と関連しなかったが、欺瞞動機のうちの相手のための動機が高ければ、関係満足度や親密度も高くなることが示された。上記のように、他者に対する欺瞞のコミュニケーションの中で、配偶者に対する欺瞞のコミュニケーションは、他の重要な他者に対する欺瞞のコミュニケーションに比べて、区別可能な特徴を有していることが示唆された。しかし、Metts（1989）の研究報告以降、夫婦関係に限定して、夫婦間の欺瞞を追及する研究は見当たらない。

夫婦間の相互作用の中で、欺瞞の形態と働きの解明は非常に重要であると考えられるにもかかわらず、この問題に関する研究は、欺瞞動機と欺瞞方略の実態を分析する段階にとどまっており、欺瞞動機と欺瞞方略が夫婦関係に及ぼす影響は全く検討されていない。夫婦の場合、お互いに欺瞞を用いるとき、一体どのような動機が働いているのか、どのような方略を使用するのか、それらの動機や方略が夫婦の関係にどのような影響を及ぼすのか、などの問題はいまだ未解明なままである。そこで、本研究は、台湾人夫婦を対象として、夫婦間の欺瞞動機と欺瞞方略を測定し、それらの内容およびそれらと結婚生活の質との関係を検討することを目的とする。具体的には、まず夫婦間の欺瞞の実態を把握するために、欺瞞動機と欺瞞方略の尺度を作成し、その妥当性を確認し、そして欺瞞動機および欺瞞方略における夫婦間の差異を検討し、さらに欺瞞動機の種類と欺瞞方略の種類によって夫婦の結婚生活の質が異なるかどうかを検討することを目指した。

## 方 法

### 調査対象者

調査対象者は台湾の台北市と台北県の229組の夫婦であり、2005年6月－8月に郵送法で質問紙調査を行った。対象者の内訳については、夫の年齢26－77歳（平均41.83歳）、妻の年齢19－77歳（平均38.94歳）、結婚年数0－54年（平均13.67年）、子供の人数0－7人（平均1.97人）、家庭の平均月収は台湾円で7.84万元（約25万3千円）であった。

### 測定内容

配偶者に物事をはっきり言わないとき、なぜ真実を言わないのかという動機・理由・原因に当たる21項目の欺瞞動機、どのように偽りの情報を伝えたのかという欺瞞の様式に当たる11項目の欺瞞方略、および2側面から成る10項目の結婚生活の質を、夫婦別々に測定した。

## 欺瞞動機

欺瞞の動機については、先行研究を参考にしつつ、関係促進、関係維持、面子保護、利己的目的、雰囲気操作といった5種類の欺瞞動機を仮定し、小集団面接法により21項目を作成した。各項目に関して、“よくあてはまる”から“まったくあてはまらない”までの4段階で評定させ、欺瞞動機が高いほど高得点になるように、4～1点で得点化した。確証的因子分析により、欺瞞動機の5因子(20項目)の構成概念妥当性が認められた(夫の場合： $\chi^2_{(115)} = 411.16, p < .001, RMSEA = .058, CFI = .93, TLI = .91, SRMR = .056$ ; 妻の場合： $\chi^2_{(115)} = 488.36, p < .001, RMSEA = .097, CFI = .91, TLI = .89, SRMR = .077$ )。潜在変数と観測変数との対応関係の強さを評価するには、因子負荷量を用いるが、その標準化推定値が.50以上であることが推奨される。また分散の程度を評価するには、各変数の平均分散抽出(Average Variance Extracted: AVE)を用いるが、50以上が必要となる(Hair et al., 2006)。夫と妻における欺瞞動機の5因子に属する項目の因子負荷量の標準化推定値は.53～.89で、平均分散抽出(AVE)は.54～.72であり、収束的妥当性が認められた。欺瞞動機の項目内容および確証的因子分析の結果を表1にまとめた。

## 欺瞞方略

欺瞞方略についても、先行研究を参考にしつつ、脚色、はぐらかし、偽装、隠蔽といった4種類の欺瞞方略を仮定し、小集団面接法により11項目を作成した。各項目に関して、“頻繁に使った”から“まったく使わなかった”までの4段階で評定させ、使用頻度が高いほど高得点になるように、4～1点で得点化した。確証的因子分析により、欺瞞方略の4因子の構成概念妥当性が認められた(夫の場合： $\chi^2_{(36)} = 115.05, p < .001, RMSEA = .098, CFI = .95, TLI = .92, SRMR = .039$ ; 妻の場合： $\chi^2_{(36)} = 91.44, p < .001, RMSEA = .082, CFI = .96, TLI = .93, SRMR = .036$ )。夫と妻における各因子に属する項目の因子負荷量の標準化推定値は.54～.62で、平均分散抽出(AVE)は.50～.62であり、収束的妥当性が認められた。欺瞞方略の項目内容および確証的因子分析の結果を表2にまとめた。

## 結婚生活の質

結婚生活の質について、伊(1991)や李(1999)などを参考に、10項目の結婚生活の質の評価項目を使用した。各項目に関して、“よくあてはまる”から“まったくあてはまらない”までの4段階で評定させ、充実度あるいは後悔度が高いほど高得点になるように、4～1点で得点化した。この10項目を夫婦別々に因子分析した結果、夫と妻との因子構造が一致しており、充実度と後悔度の2つの下位尺度に分けられることが確認できた(夫の場合：固有値は4.87と1.41で、寄与率は48.66と14.13%であり; 妻の場合：固有値は5.66と1.02で、寄与率は56.60と10.16%であった)。したがって、得点が高いほど充実度と後悔度が高いことを示し、結婚生活の質に対する意味は、2つの得点で逆になる。

なお、各項目の欠損値は1%以下であり、欠損値には平均値を代入して処理した。

表 1 欺瞞動機の項目内容と確証的因子分析の結果

| 因子名    | 項目内容                   | 夫            | 妻            |
|--------|------------------------|--------------|--------------|
| 因子 I   | 関係促進                   | <u>(.65)</u> | <u>(.72)</u> |
|        | 14. 自分がよい夫・妻だと思われたい    | .84          | .80          |
|        | 17. 自分のことをもっと配慮してほしい   | .82          | .86          |
|        | 18. 夫婦の愛情をもっと強めたい      | .75          | .89          |
| 因子 II  | 関係維持                   | <u>(.62)</u> | <u>(.59)</u> |
|        | 1. 家庭内を和やかに保ちたい        | .71          | .67          |
|        | 2. 夫婦の愛情を壊したくない        | .75          | .69          |
|        | 7. 配偶者とのもめごとを避けたい      | .90          | .86          |
|        | 10. 配偶者の誤解を避けたい        | .85          | .85          |
|        | 16. 配偶者と老親の関係を維持したい    | .70          | .75          |
| 因子 III | 面子保護                   | <u>(.64)</u> | <u>(.65)</u> |
|        | 4. 自分の面子を守りたい          | .78          | .71          |
|        | 6. 配偶者の面子を守りたい         | .86          | .83          |
|        | 8. 自分の当惑感を避けたい         | .72          | .82          |
|        | 9. 老親の面子を守りたい          | .79          | .89          |
|        | 15. 配偶者の当惑感を避けたい       | .85          | .77          |
| 因子 IV  | 利己的目的                  | <u>(.54)</u> | <u>(.57)</u> |
|        | 11. 自己利益を損ないたくない       | .75          | .63          |
|        | 24. 自己利益を増加させたい        | .84          | .85          |
|        | 22. 自分のことを配偶者に知られたくない  | .69          | .81          |
|        | 23. 真実を言うことで、物事を複雑にしたい | .53          | .68          |
|        | 25. 配偶者に束縛されたくない       | .82          | .80          |
| 因子 V   | 雰囲気操作                  | <u>(.68)</u> | <u>(.68)</u> |
|        | 20. 生活の楽しさを表したい        | .87          | .89          |
|        | 21. 自分のユーモアを表したい       | .79          | .75          |
| 因子間相関  |                        |              |              |
|        | 因子 I と因子 II            | .39          | .26          |
|        | 因子 I と因子 III           | .52          | .32          |
|        | 因子 II と因子 III          | .40          | .30          |
|        | 因子 I と因子 IV            | .41          | .21          |
|        | 因子 II と因子 IV           | .22          | .17          |
|        | 因子 III と因子 IV          | .35          | .20          |
|        | 因子 I と因子 V             | .53          | .49          |
|        | 因子 II と因子 V            | .29          | .25          |
|        | 因子 III と因子 V           | .42          | .32          |
|        | 因子 IV と因子 V            | .36          | .26          |

注 1) ( )内の数値は平均分散抽出 (AVE) である。

注 2) 表内の数値はすべて  $p < .001$ 。

表 2 欺瞞方略の項目内容と確証的因子分析の結果

| 因子名    | 項目内容                  | 夫     | 妻     |
|--------|-----------------------|-------|-------|
| 因子 I   | 脚色                    | (.54) | (.50) |
|        | 1. 冗談ふうにいわたす          | .54   | .58   |
|        | 2. 大げさに話をする           | .89   | .81   |
| 因子 II  | はぐらかし                 | (.62) | (.56) |
|        | 3. ごまかして話をする          | .80   | .77   |
|        | 4. そらして話をする           | .86   | .82   |
|        | 7. 注意をよそにする           | .77   | .76   |
|        | 10. 重要でない部分を取り出して話をする | .71   | .63   |
| 因子 III | 偽装                    | (.56) | (.53) |
|        | 6. 事実と相反する話を作る        | .79   | .74   |
|        | 12. 善意の嘘をつく           | .70   | .71   |
| 因子 IV  | 隠蔽                    | (.58) | (.57) |
|        | 5. 知らないふりをする          | .80   | .80   |
|        | 8. 言われたことを全く認めない      | .77   | .75   |
|        | 9. それに関することを全く言わない    | .71   | .73   |
| 因子間相関  |                       |       |       |
|        | 因子 I と因子 II           | .21   | .20   |
|        | 因子 I と因子 III          | .17   | .15   |
|        | 因子 II と因子 III         | .32   | .24   |
|        | 因子 I と因子 IV           | .20   | .18   |
|        | 因子 II と因子 IV          | .42   | .33   |
|        | 因子 III と因子 IV         | .34   | .32   |

注 1) ( )内の数値は平均分散抽出 (AVE) である。

注 2) 表内の数値はすべて  $p < .001$ 。

## 結 果

### 各変数における夫婦間の差異

夫あるいは妻が報告した欺瞞動機、欺瞞方略の使用度、結婚生活の質の平均得点（項目数で割ったもの）を表 3 に示した。これらの変数における夫と妻の差を検討するため、対応のある  $t$  検定を行った。その結果、欺瞞動機や欺瞞方略使用に関する夫婦間の差はあまり顕著でなく、夫よりも妻の方が利己的目的動機はやや高く、妻よりも夫の方が脚色方略や隠蔽方略の使用度はやや高かったが、その差は傾向差にとどまった。また、妻よりも夫の方が結婚生活の質が有意に高い（充実度高、後悔度低）ことが示された。

### 欺瞞動機と欺瞞方略における因子間の差異

夫あるいは妻が報告した欺瞞動機の 5 因子間に、また、欺瞞方略の 4 因子間に差があるかどうかを検討するため、5 水準あるいは 4 水準の被験者内 1 要因分散分析を行った。また、有意な効果が見られる場合は、Tukey 法による多重比較の検定（有意水準はすべて 5% に設定）を行った。

その結果、夫も妻も欺瞞動機と欺瞞方略に関する因子間の差はかなり顕著であった。欺瞞動機については、夫の場合も ( $F(4, 228) = 99.85, p < .001$ )、妻の場合も ( $F(4, 228) = 83.57, p < .001$ )、関係維持動機が最も高く、関係促進動機、面子保護動機、雰囲気操作動機と続き、利己的目的動機が最も低かった。欺瞞方略については、夫の場合も ( $F(3, 228) = 24.53, p < .001$ )、妻の場合も ( $F(3, 228) = 24.74, p < .001$ )、脚色方略とはぐらかし方略の使用度が最も高く、隠蔽方略の使用度が次に高く、偽装方略の使用度が最も低かった。

表3 各変数の平均値に関する夫婦間差異

|        | 夫    |     | 妻    |     | t 値                |
|--------|------|-----|------|-----|--------------------|
|        | M    | SD  | M    | SD  |                    |
| 欺瞞動機   |      |     |      |     |                    |
| 関係促進   | 3.05 | .77 | 3.12 | .74 | 1.09               |
| 関係維持   | 3.20 | .72 | 3.21 | .69 | -0.14              |
| 面子保護   | 2.89 | .78 | 2.97 | .75 | -1.29              |
| 利己的目的  | 2.39 | .76 | 2.49 | .75 | -1.76 <sup>†</sup> |
| 雰囲気操作  | 2.79 | .86 | 2.73 | .84 | 0.82               |
| 欺瞞方略   |      |     |      |     |                    |
| 脚色     | 2.07 | .71 | 1.96 | .66 | 1.86 <sup>†</sup>  |
| はぐらかし  | 2.01 | .69 | 1.94 | .64 | 1.20               |
| 偽装     | 1.74 | .68 | 1.67 | .63 | 1.33               |
| 隠蔽     | 1.90 | .73 | 1.79 | .67 | 1.97 <sup>†</sup>  |
| 結婚生活の質 |      |     |      |     |                    |
| 充実度    | 3.40 | .47 | 3.26 | .58 | 3.93***            |
| 後悔度    | 1.53 | .56 | 1.62 | .64 | -2.29*             |

注1) \*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , <sup>†</sup>  $p < .10$

### 欺瞞動機と欺瞞方略が結婚生活の質に及ぼす影響

最後に、夫婦ペアを分析単位にして、夫婦の結婚生活の質が欺瞞動機と欺瞞方略によって異なるかどうかを検討するため、階層線形モデル (Hierarchical Linear Model) を用い、充実度と後悔度に関して、ベースモデルと以下の2つのモデルを設定し、分析を行った。モデル1は、夫婦の性別 (夫 = 1、妻 = -1 ; Campbell & Kashy, 2002 参照)、欺瞞動機5因子および欺瞞方略4因子の主効果10変数を投入し、モデル2は、それらの10変数の主効果に加えて、夫婦の性別、欺瞞動機5因子および欺瞞方略4因子の組み合わせである一次の交互作用効果と二次の交互作用効果を投入した。その際、有意な二次の交互作用効果が全く見られなかったため、二次の交互作用効果をモデル2から削除することにした。なお、多重共線性の可能性を排除するため、各因子の欺瞞動機と欺瞞方略における中心化得点 (実測値 - 平均値) を用いた。

$$\text{モデル1 Level 1 } Y_{ij} = \beta_{0j} + \beta_{1j} \text{性別} + \beta_{nj} \text{欺瞞動機} + \beta_{pj} \text{欺瞞方略} + \varepsilon_{ij}$$

$$\text{Level 2 } \beta_{0j} = \gamma_{00} + \delta_{0j}$$

$$\beta_{kj} = \gamma_k, n = 2-6, p = 7-10, k = 1-10$$



$$\text{モデル 2 Level 1 } Y_{ij} = \beta_{0j} + \beta_{1j} \text{性別} + \beta_{2j} \text{欺瞞動機} + \beta_{3j} \text{欺瞞方略} + \beta_{4j} \text{性別} \times \text{欺瞞動機} + \\ \beta_{5j} \text{性別} \times \text{欺瞞方略} + \beta_{6j} \text{欺瞞動機} \times \text{欺瞞方略} + \varepsilon_{ij}$$

$$\text{Level 2 } \beta_{0j} = \gamma_{00} + \delta_{0j}$$

$$\beta_{ij} = \gamma_i, n = 2-6, p = 7-10, q = 11-15, r = 16-19, s = 20-39, t = 1-39$$

各モデルにおいて、Level 1 は個人レベル、Level 2 はカップルレベルを意味し、 $Y_{ij}$  はカップル  $i$  の個人（夫や妻） $j$  の充実度または後悔度の得点、 $\beta_{0j}$  はすべての夫と妻の充実度または後悔度の平均値である。 $\delta_{0j}$  と  $\varepsilon_{ij}$  はカップルと個人のレベルの変量項の指標であり、家庭間（between families）と家庭内（within family）の分散を表わす。また、 $\delta_{0j} / (\delta_{0j} + \varepsilon_{ij})$  といった級内相関係数（Intra-Class Correlation Coefficient: ICC）は、充実度または後悔度における家庭間（カップル間）分散が全分散に占める比率を表わす一方、1つの家庭の中の夫と妻の相関をも表わしている（Campbell & Kashy, 2002, p.332 に詳しい）。

まずベースモデルの結果から、充実度と後悔度の級内相関 ICC は.5035 (3.58/ (3.58+3.53)) と.4284 (3.89/ (3.89+5.19)) であること、つまり充実度と後悔度における全分散のうち、50%と43%はカップルのレベルの分散によって説明されること、また、同一家庭の中の夫と妻の相関は.50 と.43 と中程度であることが示された。

続いて2つの階層線形モデルの結果を表4にまとめた。充実度については、モデル1の結果から、夫婦の性別、欺瞞動機5因子および欺瞞方略4因子の主効果は、合わせて16.48% ((3.58-2.99)/3.58) の分散説明率（寄与率）があり、夫よりも妻の方が、また、利己的目的動機が強い夫婦や脚色方略を少なく使用する夫婦の方が、充実度が低くなることが示された。モデル2に関しては、モデル1で有意な効果が見られた変数の効果はそのまま維持されているのに加えて、関係促進動機や関係維持動機が強い夫婦の方が充実度は高くなり、はぐらかし方略を多く使用する夫婦の方が充実度は低くなることも示された。また、性別とはぐらかし方略、面子保護動機と脚色方略、利己的目的動機と脚色方略、ないし雰囲気操作動機とはぐらかし方略の間に有意な交互作用効果が見られた。

交互作用の内容を検討するため、単純傾斜の検定（Aiken & West, 1993）を行った。性別とはぐらかし方略の交互作用パターンを図1に示した。夫の場合、はぐらかし方略の使用度が高いほど充実度が低くなるが ( $B = -1.16, p < .001$ )、妻の場合、はぐらかし方略の使用度は充実度に影響しない ( $B = -.16, n.s.$ ) ことが分かった。

表 4 結婚生活の質における階層線形モデルの結果

|                       | 充実度       |      |           |      | 後悔度      |      |          |      |
|-----------------------|-----------|------|-----------|------|----------|------|----------|------|
|                       | モデル 1     |      | モデル 2     |      | モデル 1    |      | モデル 2    |      |
| 固定効果                  | $\gamma$  | s.e. | $\gamma$  | s.e. | $\gamma$ | s.e. | $\gamma$ | s.e. |
| 切片                    | 16.64 *** | .14  | 16.38 *** | .14  | 7.87 *** | .14  | 8.01 *** | .15  |
| 性別 (夫=1、妻=-1)         | .33 ***   | .08  | .27 ***   | .08  | -.24 *   | .10  | -.16     | .10  |
| <u>欺瞞動機</u>           |           |      |           |      |          |      |          |      |
| 関係促進                  | .35 †     | .19  | .45 *     | .19  | -.48 *   | .22  | -.73 **  | .22  |
| 関係維持                  | .19       | .18  | .47 *     | .19  | -.55 *   | .21  | -.71 **  | .23  |
| 面子保護                  | .04       | .19  | -.08      | .19  | .27      | .22  | .32      | .23  |
| 利己的目的                 | -.77 ***  | .15  | -.72 ***  | .15  | .95 ***  | .17  | .96 ***  | .17  |
| 雰囲気操作                 | .20       | .16  | .23       | .17  | -.12     | .19  | -.16     | .19  |
| <u>欺瞞方略</u>           |           |      |           |      |          |      |          |      |
| 脚色                    | .30 *     | .13  | .27 *     | .13  | -.28 †   | .15  | -.22     | .15  |
| はぐらかし                 | -.32      | .19  | -.57 **   | .20  | .30      | .22  | .54 *    | .23  |
| 偽装                    | -.19      | .15  | -.20      | .16  | .23      | .18  | .17      | .19  |
| 隠蔽                    | -.10      | .18  | -.12      | .19  | .41 *    | .21  | .40 †    | .22  |
| <u>性別と欺瞞動機の交互作用</u>   |           |      |           |      |          |      |          |      |
| 性別×関係促進               |           |      | -.07      | .18  |          |      | -.04     | .22  |
| 性別×関係維持               |           |      | .16       | .17  |          |      | -.10     | .20  |
| 性別×面子保護               |           |      | .03       | .18  |          |      | .17      | .22  |
| 性別×利己的目的              |           |      | .12       | .13  |          |      | -.20     | .16  |
| 性別×雰囲気操作              |           |      | -.21      | .15  |          |      | .13      | .18  |
| <u>性別と欺瞞方略の交互作用</u>   |           |      |           |      |          |      |          |      |
| 性別×脚色                 |           |      | .05       | .12  |          |      | -.02     | .14  |
| 性別×はぐらかし              |           |      | -.53 **   | .18  |          |      | .17      | .21  |
| 性別×偽装                 |           |      | .15       | .14  |          |      | .16      | .17  |
| 性別×隠蔽                 |           |      | .28 †     | .17  |          |      | -.16     | .20  |
| <u>欺瞞動機と欺瞞方略の交互作用</u> |           |      |           |      |          |      |          |      |
| 関係促進×脚色               |           |      | -.15      | .23  |          |      | -.41     | .26  |
| 関係促進×はぐらかし            |           |      | .58       | .36  |          |      | -.21     | .43  |
| 関係促進×偽装               |           |      | .18       | .25  |          |      | -.07     | .30  |
| 関係促進×隠蔽               |           |      | -.34      | .33  |          |      | -.25     | .39  |
| 関係維持×脚色               |           |      | .38       | .23  |          |      | .26      | .28  |
| 関係維持×はぐらかし            |           |      | .03       | .28  |          |      | -.64 †   | .33  |
| 関係維持×偽装               |           |      | -.09      | .24  |          |      | .08      | .28  |
| 関係維持×隠蔽               |           |      | .16       | .27  |          |      | -.11     | .32  |
| 面子保護×脚色               |           |      | -.52 *    | .24  |          |      | .09      | .28  |
| 面子保護×はぐらかし            |           |      | -.19      | .33  |          |      | .64      | .39  |
| 面子保護×偽装               |           |      | .27       | .27  |          |      | -.29     | .32  |
| 面子保護×隠蔽               |           |      | .17       | .30  |          |      | -.28     | .35  |
| 利己的目的×脚色              |           |      | .37 *     | .15  |          |      | -.29     | .18  |
| 利己的目的×はぐらかし           |           |      | -.20      | .23  |          |      | .09      | .27  |
| 利己的目的×偽装              |           |      | .05       | .19  |          |      | .02      | .22  |
| 利己的目的×隠蔽              |           |      | .18       | .19  |          |      | .25      | .22  |
| 雰囲気操作×脚色              |           |      | .10       | .18  |          |      | .28      | .21  |
| 雰囲気操作×はぐらかし           |           |      | -.57 *    | .24  |          |      | .28      | .29  |
| 雰囲気操作×偽装              |           |      | .13       | .20  |          |      | -.42 †   | .23  |
| 雰囲気操作×隠蔽              |           |      | .23       | .24  |          |      | .34      | .28  |
| <u>変量効果</u>           |           |      |           |      |          |      |          |      |
| レベル 2                 | 2.99 ***  |      | 2.68 ***  |      | 2.41 *** |      | 1.99 *** |      |
| レベル 1                 | 2.94      |      | 2.61      |      | 4.55     |      | 4.19     |      |

注 1) \*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

欺瞞動機と欺瞞方略に関する交互作用パターンを図2-図4に示した。図2に示したように、脚色方略使用高群の傾斜が有意となり ( $B = -.60, p < .01$ )、脚色方略使用高群では面子保護動機の高い夫婦よりも面子保護動機の低い夫婦の方が充実度は高かったが、脚色方略使用低群の傾斜は逆方向であり ( $B = .44, p < .05$ )、脚色方略使用低群では面子保護動機の低い夫婦よりも面子保護動機の高い夫婦の方が充実度は高かった。図3に示したように、脚色方略使用高群の傾斜は有意でなかったが ( $B = -.35, n.s.$ )、脚色方略使用低群の傾斜は有意であり ( $B = -1.09, p < .001$ )、脚色方略使用低群では利己的目的動機の高い夫婦よりも利己的目的動機の低い夫婦の方が充実度は高かった。図4に示したように、はぐらかし方略使用高群の傾斜は有意でなかったが ( $B = -.34, n.s.$ )、はぐらかし方略使用低群の傾斜は有意となり ( $B = .80, p < .01$ )、はぐらかし方略使用低群では、雰囲気操作動機の低い夫婦よりも雰囲気操作動機の高い夫婦の方が充実度は高かった。

後悔度については、モデル1の結果から、夫婦の性別、欺瞞動機5因子および欺瞞方略4因子の主効果は、合わせて38.05% ( $(3.89-2.41) / 3.89$ )の分散説明率(寄与率)があり、夫よりも妻の方が、また、関係促進動機や関係維持動機の弱い夫婦、利己的目的動機の強い夫婦、隠蔽方略を多く使用する夫婦の方が、後悔度は高くなることが示された。モデル2においても、モデル1で有意な効果が見られた変数の効果はそのまま維持されているのに加えて、はぐらかし方略を多く使用する夫婦の方が後悔度は高くなることも示された。ただし、性別、欺瞞動機5因子、欺瞞方略4因子の関わる一次の交互作用効果は全く有意でなかった。

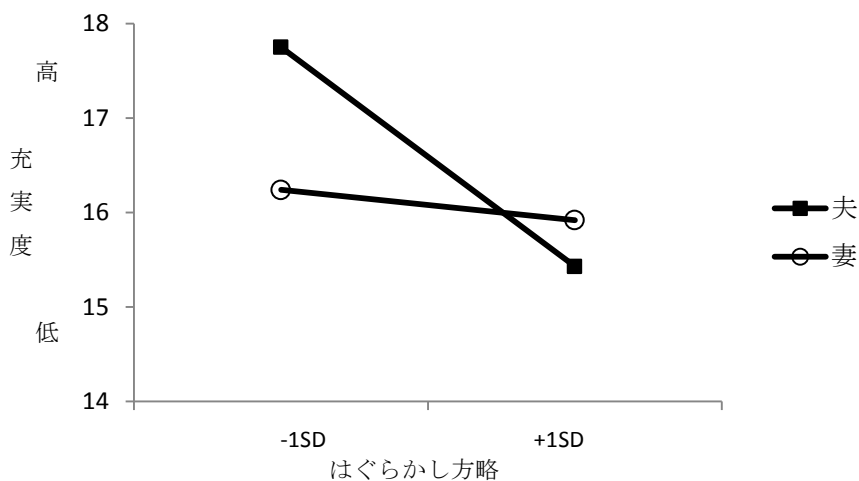


図1 充実度に関する性別とはぐらかし方略の交互作用

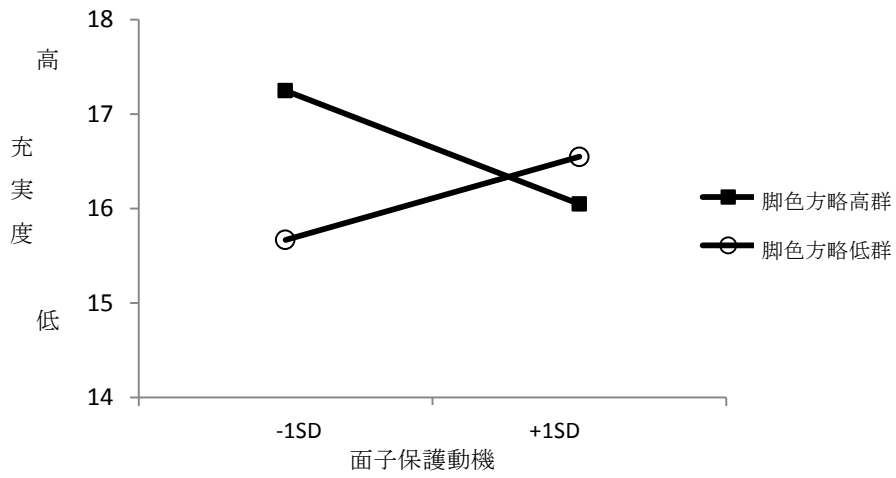


図2 充実度に関する面子保護動機と脚色方略の交互作用

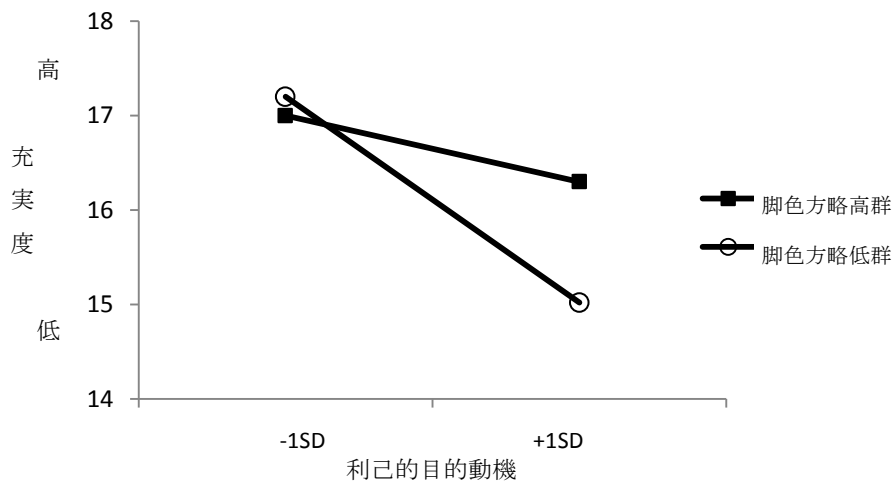


図3 充実度に関する利己的目的動機と脚色方略の交互作用

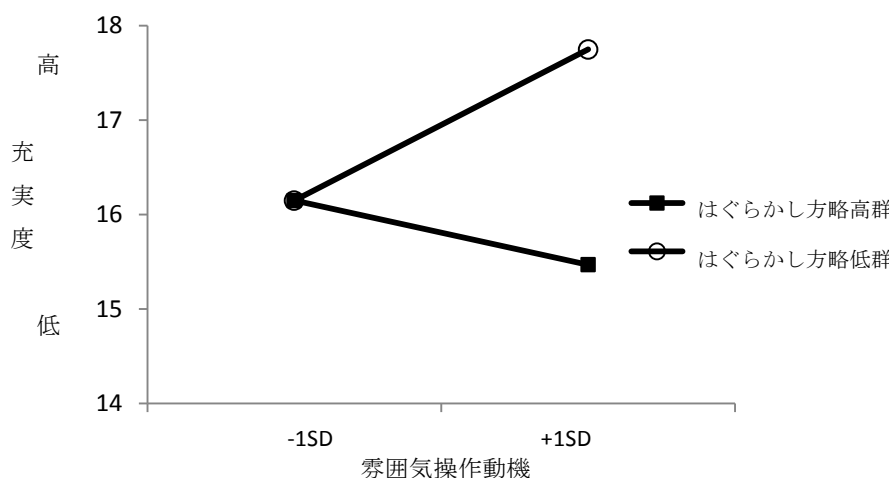


図4 充実度に関する雰囲気操作動機とはぐらかし方略の交互作用

## 考 察

夫婦間の相互作用に見られる欺瞞に着目した本研究の目的は、夫婦間に生じる欺瞞の動機と方略を検討し、結婚生活の質に及ぼすそれらの影響を検討することであった。分析の結果から、夫婦間の欺瞞動機は、関係促進、関係維持、面子保護、利己的目的、雰囲気操作の5種類に、欺瞞方略は、脚色、はぐらかし、偽装、隠蔽の4種類に分類されることが確認された。そして、夫婦の関係促進のためや関係維持のための欺瞞であれば、あるいは、脚色といった方略を使用する欺瞞であれば、欺瞞は夫婦関係に良い影響をもたらすが、利己的目的のための欺瞞であれば、あるいは、はぐらかしや隠蔽といった方略を使用する欺瞞であれば、夫婦関係に悪い影響を及ぼすことが示された。また、夫婦関係に対する欺瞞動機の影響は、欺瞞方略によって異なるという交互作用効果も示された。

まず、配偶者に物事を率直に言わないときの動機・理由・原因に当たる欺瞞動機として、本研究では5因子が得られたが、この5因子は、先行研究の分類（例えば、Buller & Burgoon, 1994; DePaulo et al., 1996; Vrij, 2000）や本研究の当初の仮定と一致することが、確証的因子分析により確認された。欺瞞に走る動機としては、夫婦ともに、家庭の平和、夫婦間の愛情、親との関係を保つなどの関係維持を最も強く意識し、夫婦という二者関係の促進および自分・配偶者・親の面子保護を次に強く意識していた。逆に、夫婦ともに、自己の利益・自由にかかわる利己的目的を最も弱く意識していた。つまり、台湾人夫婦にとって、配偶者に対する欺瞞の動機は、主に関係促進、関係維持、面子保護などの対人的な動機であるが、内容的にこの動機には、夫婦という二者間関係に限定されない関係、すなわち家族全体の関係や親との関係も含まれていることが分かった。アメリカの研究では、大学生の場合、配偶者に対して欺瞞を用いる動機は、配偶者の面子や自尊心を保護するためだとされ（Metts, 1989）、配偶者への思いやりが示された。これに対して、本研究の結果から、台湾人夫婦は、夫婦関係よりもより広い範囲の家族関係を重要視していると言える。また、利己的目的は夫婦間の

欺瞞の動機としてかなり低いことから、夫婦間に欺瞞が発生する理由は自己中心的なものではないと言えよう。

次に、夫婦間欺瞞方略については、確証的因子分析により、脚色、はぐらかし、偽装、隠蔽の4因子に分類された。先行研究では、情報の偽りの程度（例えば、DePaulo et al, 1996）や情報の操作の程度（例えば、Metts, 1989）から欺瞞方略の種類が区別されていた。こうした欺瞞方略に関する先行研究の分類基準を本研究で得られた結果に適用すると、本研究の4因子の欺瞞方略は、①大きな冗談めいた表現を使用して、部分的に偽る脚色方略、②相手が真実に気づかないように、情報の焦点をそらせるはぐらかし方略、③真実の情報を否定したり、隠したりする隠蔽方略、④真実の情報を隠して、完全に偽りの情報を与える偽装方略、の順に偽りの程度や操作の程度が高くなると考えられる。これら4種類の欺瞞方略の中で、夫婦とも、脚色方略やはぐらかし方略をより多く使用しており、偽装方略を最も少なく使用していた。Metts（1989）も、婚約者・恋人・友人に対してよりも配偶者に対しての方が省略方略（はぐらかし方略と類似）を使う頻度が最も高く、偽造方略（偽装方略と類似）を使う頻度が最も低くなることを見出していたので、本研究でも類似した結果が得られたといえる。しかし、4因子の欺瞞方略の平均値は、1点-4点の4点尺度で1.67-2.07であり、いずれも非常に低いことが明らかになり、台湾人は、夫婦の間で、欺瞞方略をあまり使用しないことが判明した。

続いて、各変数における夫婦間の差異をみると、結婚生活に対する評価が妻に比べ夫の方が高かったことは、過去の研究結果（周, 2009; 周・深田, 2014; 蕭・黄, 2010; Vaillant & Vaillant, 1993 など）と一致している。また、夫に比べ、妻の方が利己的目的動機が高い傾向にあり、妻に比べ、夫の方が脚色方略や隠蔽方略の使用度が高い傾向にあることが示された。欺瞞動機や欺瞞方略使用の性差に関するアメリカと日本の研究では相反する結果が見出され、アメリカでは男性の方が（例えば、Blair et al., 2001）、日本では女性の方が（渋谷・渋谷, 1993）、欺瞞行動を多く採っていた。どちらかといえば、本研究の結果はアメリカの結果に方に近いように見えるが、傾向差しか存在せず、夫婦間に明確な性差があるという結論は下し難い。今後、欺瞞の動機と方略使用における夫と妻、あるいは男と女の間の差異は、文化圏によってどのように異なるのかについての更なる検討が必要だと思われる。

そして、夫婦の結婚生活の質に及ぼす欺瞞動機と欺瞞方略の影響を階層線形モデルの分析によって検討したところ、興味深い結果が得られた。すなわち、それぞれの欺瞞動機や欺瞞方略には、結婚生活の質に対する悪い影響と良い影響といった相矛盾する影響が併存すること、さらには、欺瞞動機と欺瞞方略の交互作用の影響も見出された。特に、関係促進動機や関係維持動機が高ければ、夫婦の充実度が増加し、後悔度が減少するのに対して、利己的目的動機が高ければ夫婦の充実度が減少し、後悔度が増加するという結果は、利他的動機の好影響、逆に利己的動機の悪影響を示したと考えられる。Metts（1989）は、嘘をつくとき、相手のための欺瞞動機が高ければ、関係満足や親密度も高くなることを発見しており、本研究でも一致した結果が示された。

欺瞞方略については、夫婦関係に及ぼす効果は、方略の種類によって異なることが明白に示された。脚色方略の使用度が高ければ、夫婦の充実度が増加し、後悔度が減少するのに対して、はぐら

かし方略の使用度が高ければ充実度が減少し、後悔度が増加し、隠蔽方略の使用度が高ければ後悔度が増加することから、脚色方略の好影響、はぐらかし方略と隠蔽方略の悪影響が示された。脚色方略は日常生活のささやかな嘘や冗談風の誇張といった性格が強く、社交上の嘘に類似しており、人間関係の緊張を和らげるように働いたと思われる。その反面、夫や妻は、相手のはぐらかし方略と隠蔽方略を、悪質な嘘と認知していると考えられる。ただ、偽装方略については、その主効果も交互作用効果も一切有意でなかった。それは、夫の場合も妻の場合も、偽装方略の平均値は極めて低く、床効果が出現したため、効果が検出できなかったと推測できる。

また、充実度に関しては、性別または雰囲気操作動機とはぐらかし方略との有意な交互作用効果、面子保護動機または利己的目的動機と脚色方略との有意な交互作用効果が見られた。はぐらかし方略を多く使用すればするほど、妻に比べ、夫の方がより結婚生活の充実度が減少していくことから、結婚生活における夫のはぐらかし方略がもたらすダメージに注意を払わなければならないと指摘できる。そして、はぐらかし方略使用度が低い場合は、雰囲気操作動機が高いほど充実度が高くなり、面子保護動機の低い場合は、脚色方略の使用度が高いほど充実度が高くなることが示されたので、この2つの交互作用は限定効果と称してよいであろう。また、利己的目的動機の高い場合は、脚色方略使用度が高ければ充実度が高くなるので、脚色方略は利己的目的動機の悪影響を緩和する機能をもつこと、すなわち、脚色方略の緩和効果が示された。これらの交互作用パターンから、結婚生活の質に対して、欺瞞動機と欺瞞方略は、緩和効果と限定効果をもつことが解明された。

このように、本研究は、夫婦という二者関係において、欺瞞動機と欺瞞方略が結婚生活の質に及ぼす影響を検討し、興味深い示唆を得た。今後、異なる性質の欺瞞事態を取り上げて、それぞれの事態における欺瞞動機や欺瞞方略の違いないしその影響を検討することにより、そして、老親との関係や夫婦間の勢力関係などの要因を取り上げて、欺瞞と結婚の質との関係に及ぼすそれらの要因の影響を検討することにより、研究をさらに深化させる方向が考えられる。また、長期的・縦断的なデータを収集して、本研究の結果の妥当性を検討することも将来の課題の一つになる。

## 引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. (1993). *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Sage: Newbury Park.
- Blair, T. M., Nelson, E. S., & Coleman, P. K. (2001). Deception, power, and self-differentiation in college students' romantic relationships: An exploratory study. *Journal of Sex and Marital Therapy*, **27**, 57-72.
- Buller, D. B., & Burgoon, J. K. (1994). Deception: Strategic and nonstrategic communication. In J. A. Daly & J. M. Wiemann (Eds.), *Strategic interpersonal communication*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. pp. 191-223.
- Camden, C., Motley, M. T., & Wilson, A. (1984). White lies in interpersonal communication: A taxonomy and preliminary investigation of social motivations. *Western Journal of Speech Communication*, **48**, 309-325.

- Campbell, L., & Kashy, D. A. (2002). Estimating actor, partner, and interaction effects for dyadic data using PROC MIXED and HLM: A user-friendly guide. *Personal Relationships*, **9**(3), 327-342.
- Cole, T. (2001). Lying to the one you love: The use of deception in romantic relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **18**, 107-129.
- DePaulo, B. M., Epstein, J. A., & Wyer, M. M. (1993). Sex differences in lying: How women and men deal with the dilemma of deceit. In M. Lewis & C. Saarni (Eds.), *Lying and deception in everyday life*. New York: Guilford Press. pp.126-147.
- DePaulo, B. M., & Kashy, D. A. (1998). Everyday lies in close and casual relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 63-79.
- DePaulo, B. M., Kashy, D. A., Kirkendol, S. E., Wyer, M. M., & Epstein, J. A. (1996). Lying in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 979-995.
- DePaulo, B. M., Stone, J. I., & Lassiter, G. D. (1985). Deceiving and detecting deceit. In B. R. Schlenker (Ed.), *The self and social life*. New York: McGraw-Hill. pp. 323-370.
- Ekman, P. (1985). *Telling lies*. New York: Norton.
- Ekman, P. (2001). *Telling lies: Clues to deceit in the marketplace, politics, and marriage*. New York: Norton.
- Hair, J. F., Black, W., Babin, B., Anderson, R. E., & Tatham, R. L. (2006). *Multivariate data analysis (6<sup>th</sup> ed.)*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- 周 玉慧 (2009). 夫妻間衝突因應策略類型及其影響 中華心理學刊, **51**(1), 81-99.
- 周 玉慧・深田博己 (2014). 結婚の質に及ぼす夫婦間のサポートの授受とサポート獲得方略の授受の関係：二者関係における相互作用過程の観点から 対人コミュニケーション研究, **2**, 1-18.
- Knapp, M. L., & Comadena, M. E. (1979). Telling it like it isn't: A review of theory and research on deceptive communication. *Human Communication Research*, **5**, 270-285.
- Krauss, R. M. (1981). Impression formation, impression management, and nonverbal behaviors. In E. T. Higgins, C. P. Herman, & M. P. Zanna (Eds.), *Social cognition: The Ontario Symposium*. Vol. **1**. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp. 323-341.
- 李 良哲 (1999). 維繫婚姻關係重要因素的成人期差異初探 教育與心理研究, **22**, 145-160.
- 利 翠珊 (1995). 年輕夫妻互動歷程之探討：以台北地區年輕夫妻為例之一項初探性研究 本土心理學研究, **4**, 260-321.
- Metts, S. (1989). An exploratory investigation of deception in close relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **6**, 159-179.
- Miller, G. R., Mongeau, P. A., & Sleight, C. (1986). Fudging with friends and lying to lovers: Deceptive communication in personal relationships. *Social and Personal Relationships*, **3**, 495-512.
- Mitchell, R. W. (1986). A framework for discussing deception. In R. W. Mitchell & N. S. Mogdil (Eds.), *Deception: Perspectives on human and nonhuman deceit*. Albany: State University of New York Press. pp.3-4.
- 蕭 英玲・黃 芳銘 (2010). 婚姻滿意度與憂鬱傾向：貫時性對偶分析 中華心理學刊, **52**(4), 337-396.



- 渋谷昌三 (1996). 人はなぜウソをつくのか? 東京: 河出書房新社
- 渋谷昌三・渋谷園枝 (1993). 対人関係における deception (嘘) 山梨医科大学紀要, **10**, 57-68.
- Turner, R. E., Edgley, C., & Olmsted, G. (1975). Information control in conversations: Honesty is not always the best policy. *Kansas Journal of Speech*, **11**, 69-89.
- Vaillant, C. O., & Vaillant, G. E. (1993). Is the U-curve of marital satisfaction an illusion? A 40 year study of marriage. *Journal of Marriage and the Family*, **55**, 230-239.
- Vrij, A. (2000). *Detecting lies and deceit*. Sussex, UK: Wiley.
- Zuckerman, M., & Diriver, R. E. (1985). Telling lies: Verbal and nonverbal correlates of deception. In A. W. Siegman & S. Feldstein (Eds.), *Multichannel integrations of nonverbal behavior*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 129-148.
- 伊 慶春 (1991). 台北地區婚姻調適的一些初步研究發現 国家科学委员会研究彙刊: 人文及社会科学, **1**, 151-173.

# **Effects of deceptive motives and strategies on marital quality**

**Yuh-Huey JOU** (Academia Sinica, Taiwan)

and

**Hiromi FUKADA** (Hiroshima Bunkyo Women's University)

Focusing on deceptive communication, this paper constructs a deceptive motive scale and a deceptive strategy scale to examine the effect of deceptive motives and deceptive strategies on marital quality among married couples. Questionnaire data from 229 Taiwanese married couples dealt with five kinds of deceptive motive (maintaining relationship, facilitating relationship, saving face, self-interest aim, and manipulating atmosphere), four types of deceptive strategy (exaggeration, diversion, falsification, and concealment), and two aspects of marital quality (satisfaction and regret). The results showed that five kinds of deceptive motive and four types of deceptive strategy were confirmed by confirmatory factor analysis. Couples' marital quality was varied by deceptive motives and deceptive strategies. Those who reported higher motivations of maintaining and facilitating relationship or used more exaggeration strategy tended to report higher satisfaction and lower regret. Those who reported higher self-interest aim motive or used more diversion or concealment strategy tended to report lower satisfaction and higher regret. The interaction effects of deceptive motive and strategy on satisfaction were also found. The patterns of those interactions seem like limiting and buffering effects.

**Key words:** deceptive motives, deceptive strategies, marital quality, married couples, Hierarchical Linear Modeling.